

花園大学文学部研究紀要 第五二号 二〇二〇年三月 抜刷

『為頼集』の伝本・追考

曾根誠一

# 『為頼集』の伝本・追考

曾根 誠 一

## はじめに

嘗て、筑紫平安文学会著『為頼集全釈』<sup>(1)</sup>（以下、『全釈』と略称）の刊行に加わった時、『為頼集』の伝本」（以下、前稿と称す）を執筆したことがある。その折、『私家集伝本書目』<sup>(2)</sup>掲載の「田中」本は、個人所蔵の伝本であり、閲覧する手懸かりさえなく、「未見」と記さざるを得なかった。

その後、宮内庁書陵部本の親本である、鎌倉中期の真観（藤原光俊、建治二年<sup>(3)</sup>没）書写にかかる冷泉家時雨亭文庫本の影印が、『平安私家集十一』<sup>(3)</sup>に収載され、解説も付されて利用が可能になり、今日に至っている。

今般、某古書肆の目録に、「江戸前期写」の『道成集・為頼集』が掲載され、入手した。この伝本には、猪苗代兼宜旧蔵本との異同が青筆で記されており、本文の極一部分に過ぎないが、判明する。また、京都市歴史資料館に寄託されている山本家

本『為頼集』の画像が、公開されていることにも気付いた。

この結果、前稿では言及できなかった四伝本の存在が確認されたので、これらについて報告し、前稿の補足を試みたいと思う。

## 一

先ず、独立した伝本として伝存している訳ではない猪苗代兼宜本を除く、冷泉家時雨亭文庫本・山本家本・架蔵本の書誌を記すと、次の通りである。

冷泉家時雨亭文庫本<sup>(4)</sup>（以下、冷泉家本と略称）

写本、一冊。大きさは二二・一×一四・七裡で、大和綴。

鎌倉中期の真観書写本。梅鉢文様の蠟箋の表紙の左上に、外題を「為頼朝臣集」と墨書。内題は、見返し中央に「ためより」。裏表紙は、「為頼朝臣集端欠其外處々

紛失欵／享保八年修覆之」（裏表紙見返し）とあるように、十四代為久による後補。首尾に遊紙はなく、墨付十一丁。一面十行乃至十一行書きで、和歌一首二行書き。書き入れあり。古筆切にするため、8番歌詞書から23番歌まで、45番歌詞書「きたのかたの」から79番歌までと勘物が切り出され、欠脱する。ただ、古筆切として、48番歌から50番歌、53番歌から56番歌、68番から74番歌、勘物の最後の三行の本文は伝存する。

#### 山本家本<sup>5)</sup>

写本、一冊。京都市歴史資料館に寄託。大きさは二七・〇×一九・〇糎で、大和綴。渋引きの表紙の左上に、外題を「為頼朝臣集」と墨書。内題は「為頼朝臣集」。首尾に遊紙はなく、墨付十丁。一面十二行書きで、和歌一首一行書き。墨筆と朱筆による書き入れあり。巻首に「生山書庫」の朱印、裏表紙右下に「山本家典籍 370」の整理のための貼り紙あり。「生山」は、賀茂季鷹の雅号なので、季鷹旧蔵本。

#### 架蔵本

写本、一冊。大きさは二八・五×二一・〇糎で、大和綴。『道成集』と合綴する。巻末に「延午<sup>6)</sup>初冬仲八 源通

規（花押）」と識語が記される。久我通誠が延宝六年1698十月十八日に、十九歳で書写したもので、元奥書を「奥<sup>7)</sup> 永仁元年十一月校他本了」と記す。山鳩色の地に横筋目文様の表紙の左上に、外題を「道成集／為頼集」と墨書。内題は「為頼朝臣集」。表紙は後補で、見返しの貼付はない。首尾に遊紙各一丁、墨付八丁。一面十三行書きで、和歌一首一行書き。墨筆による書き入れあり。青筆による書き入れは、「明治十八年一月八日以猪苗代兼宜旧蔵本一校了」（八丁裏）とあり、兼宜（享保五年1720生、享和三年1803没）所蔵本文と知られる。

尚、該本は、『道成集』と合綴されており、『私家集伝本書目』「為頼集」の項に、「道成為頼家集 一 写田中」（15頁）とある記述と一致すること（『道成集』と合綴する伝本は、該本のみ）。『田中教忠蔵書目録<sup>7)</sup>』収載の「年譜」明治十八年条に、「一月、故刑部卿平忠盛朝臣詠平経盛卿詠家卿集、合本を書き寫す」（162頁）とあり、未所蔵の家集を書写している一方で、該本に猪苗代兼宜本で「一校」を加えたのが一月八日であること。これらを勘案すると、教忠が書写した「忠盛・

「経盛集」の親本は、兼宜本であった可能性が考えられるとともに、該本は田中教忠氏旧蔵本であると考えてよいように思われる。

## 二

先ず、鎌倉中期書写の冷泉家本と、それを江戸時代初期に転写した宮内庁書陵部本（以下、書陵部本と略称）の本文を比較して、漢字と仮名遣いを除く異同を確認すると、次の通りである（上段は冷泉家本、下段は書陵部本。傍線部及び×印は異同箇所）。

①ひとをしそあましかはとなけさしかこ（2番歌初句）

②人しれすおも×たまふる―ひ（4番歌詞書）

③おほかたのそらのつゆかは―う（4番歌第二句）

④あひてのちのわかれ―は（6番歌詞書）

⑤五節たてまつりしときなにかといひしかは―に、  
るい（24番歌詞書）

⑥ゑりくしもとめてかせとありしかは―を（24番歌詞書）

⑦すのかたになしたるに<sup>な</sup>あめのふるころ―×（29番歌詞書）

⑧あめのふるころうみににしたり―×（29番歌詞書）

⑨さ夜ふけていつちくるまのつきならん―う（35番歌第二句）

⑩やまのへさしているにやあるらむ―は（35番歌第四句）

⑪かやりひにやあらむおりすきたるけふりの―×（36番歌詞書）

⑫正月ついたちこ×ろあるひとの御もとに―心（39番歌詞書）

⑬むまこのをうなにてむまれたる×をき、て―日（40番歌詞書）

⑭きささかねもししからすはよきくにの―も（40番歌第二句）

⑮わかき受領の妻かねかも、し―×（40番歌第五句）

⑯ふたにいちひめのかたなとかけるところに―う（43番歌詞書）

⑰いちひめのかみのいかきのいかなれは―や（43番歌第三句）

⑱をとろへはへりにけるかほをか、みのかけに―り（44番歌詞書）

⑲はかりてあはさりける女に×××××―よひく―に

## (49 番歌詞書)

⑳ たれもおもひのひとつならねは―ふた(70 番歌第五句)

㉑ おものもちのひとものをとるを見て―め(81 番歌詞書)

㉒ ひとりしてあまたからむるおもものち―、／り(81 番歌第二・三句)

㉓ もたるわたをそたつぬへらなる―し（51 款）(81 番歌第五句)

㉔ おもひいて、あはれかりきこえしに―に(82 番歌詞書)

㉕ つかさめしにのそむことありけるころ―×(84 番歌詞書)

## 書)

右の異同26例の内、冷泉家本の誤写を書陵部本の書写者が校訂した事例としては、①②⑧⑱の4例がある。

①は、第三句末が過去の助動詞「き」の已然形「しか」で終止していることから、初句「しそ」を係助詞「こそ」に意改したものであり、②は、「おもひ」を補記したものである。

⑧は、「うみにしたり」の「に」の下に「〇」を記して「尔」を傍記してあるのを、文意を考えて衍字と判断し省略し、⑱は、「いかなれば」の傍記「や」を、歌意を考えて取り、校訂したものである。

また、書陵部本の校訂が、誤った異文を生じた事例として、

㉚ 「ふたつ」(他本は「ひとつ」)があり、㉛は、第三句の傍

記「よひく」に」を、詞書の続きとして誤写した事例である。

これ以外の書陵部本の誤写20例の内、12例は字形の類似によるものである。

③は「曾」を「宇」、⑤は「可止」を「尔、」と誤読した上で、「以比」の仮名を「為以」に変えたものである。⑥は「世」を「遠」に誤読し、文意が通らないので願望の終助詞「がな」の可能性を考えて「奈坎」と傍記したものである。⑨は「知」を「良」に、⑫は「己呂」の「己」を「己、」と誤読して、「心」と漢字表記にしたものである。⑭は「志」を「裳」に、⑮は踊り字の「、」を「之」の第一画と誤読して脱字したものである。⑯は「可」を「宇」に、⑳は「母」を「女」に誤読したものであり、㉑の2例は「良」を「、」、「毛」を「利」に、㉒は「良」を「之」に誤読し、文意が通らないので、「良坎」と傍記したものである。

残る8例は、思い込みによる誤写である。

④は、「あはて」では「のちのわかれ」は成立せず、⑦は接続助詞「に」を欠脱し、⑩は「やまのへ」を一般的な「は」に誤写したものである。⑪は係助詞「や」の前の、断定の助動詞「なり」の連用形「に」を欠脱し、⑬は「むまれたる日」と増補した例である。⑱は「留」と「利」の字形の類似

もあるが、思い込みによる誤写であろう。②は動詞「あはれかり」を形容動詞と誤認して「に」に誤写し、⑤は「こと」の連綿体の「一」(一)を見落とした脱字である。

次に、傍記の例を掲げると、次の通りである。

①いまかとするそらてにうつせるうつりかはーら (32番歌第二句)

②せん歌ねう殿よりあゆのかたをつくりてーよ (39番歌詞書)

③しらたまかなみたかなにそよほひつかなーおほひつかな (49番歌第三句)

①は、「うつせるうつりか」との繋がりから、傍記の「て」を取るべきところだが、書陵部本は採用しただけでなく、傍記を省略している。②は傍記の「ヨ」を取って本文を改め、③は、「異同」⑱と同一の事例であり、和歌の傍記本文を詞書の続きとして誤読し、欠脱したものである。

また、冷泉家本のミセケチは5例あり、「をけるつゆキクをや」(4番歌第五句)、「うらもをとをみ」(30番歌第三句)、「うすきたもとをたのむミカには」(37番歌第三句)、「いのるこ、ろのかくれなきケレハかな」(37番歌第五句)、「のそむことありけるミけるミころ」(84番歌詞書)について、書陵部本は全て、訂正本文を取っ

ている。

踊り字については、冷泉家本が三字の場合、「なにも、、、なからむものを」(24番歌詞書)「いへの庭ところ、、、すのかたに」(29番歌詞書)、二字の場合「見えぬもの、」(50番歌第四句)という表記方法を取っているのを、書陵部本は「く」に変換して書写していることを確認しておく。

以上の結果は、『為頼集』86首中の42首に関する検討結果であるが、書陵部本の書写態度が丁寧とはいいい難いこと、田中氏が指摘される「いささか荒っぽい」(50頁)実態を確認した次第である。

尚、書陵部本が和歌一首二行書きで書写しているのは、親本である冷泉家本に依拠した結果であるのだが、現在最善本とされる三手文庫本も同一の形式であることから、共通する祖本がこの形式で書写されていたことは、間違いない。そして、以下論ずる江戸時代の書写にかかる山本家本・架蔵本が和歌一首一行書きで、漢字を多く使用していることは、相違していることに注意しておきたい。

### 三

次に、三手文庫本と山本家本との本文異同について、検討

するために、漢字と仮名遣いを除く異同箇所を掲げると、次の通りである（上段は三手文庫本、下段は山本家本。傍線部及び×印は異同箇所）。

① めのをよふ山のをちかきゆふまくれ―端（1番歌第二句）

② はなをはえこそおもひかへさね―かへさ（21番歌第五句）

③ いまもとるそてにうつせるうつりかは―か（32番歌初句）

④ 春宮などに人くまいり×つかうまつると―て（34番歌詞書）

⑤ いちひめのかみのいかきのいかなれや―に（43番歌第二句）

⑥ かりの子もすもりはあるといふめるを―り（47番歌第二句）

⑦ やまふきのさけるみきわをみわたせは―振（52番歌初句）

⑧ そこ、そ春のさかりなりけれ―春（52番歌第四句）

⑨ 故あはたの右大臣との、はかなくなりたまひての年―××（60番歌詞書）

⑩ かれはつるふゆもありけるあきはきの―り（63番歌第二句）

⑪ としころあひそいたる人なくなりわたるころ―に（67番歌詞書）

⑫ こひつる人もありといふなり―く（76番歌第四句）

⑬ ひとりしてあまたからむるをものもち―う（81番歌第二句）

右の13例には、三手文庫本本文を訂正し得る異文は、見られないといつてよからう。

①は、「山のを」を一般的な表現の「山の端」に誤写したものであり、②は、傍記の「ハナレ」の「レ」を誤脱したか、「はなさね」という本文を取ったのであろう。③は、「毛」を「可」に誤読した字形の類似に基づく錯誤である。④は、「まいてつかうまつる」でも文意は変わらないが、冷泉家本・架蔵本も「て」がないので、増補したものであろう。⑤は、「神の斎垣」が主語なので、「いかきに」では歌意は通らない。⑥⑩は、文法上は「あり」「けり」という山本家本の終止形が正しいが、余情表現で「ある」「ける」という連体形を架蔵本も取っており、これが元来の本文なのであろう。⑦は、「山吹」を山の姿の意の「山振」に誤写したものであり、⑧は、

架蔵本にも傍記「はな」があるので、見落とした誤写であろう。⑨は、文意は変わらないが、「はかなくなり」の「はか」を見落としたものである。⑩は熟さない表現だが、架蔵本も「わたる」とあり、「にたる」は平易な表現に改めたものである。⑫は、「川」を「久」に誤読し、⑬は、「可」を「宇」に誤写した字形の類似に基づく錯誤である。

以上のことから、山本家本は三手文庫本系統に属することが判明するとともに、和歌が一首一行書きであること、漢字を多く使用していること、右記の誤写があることから、三手文庫本より下位に位置付けられる伝本であるといえよう。

#### 四

次に、三手文庫本と架蔵本との本文異同（歌順も含む）について、検討するために、漢字と仮名遣いを除く異同箇所を掲げると、次の通りである（上段は三手文庫本、下段は架蔵本。傍線部及び×印は異同箇所）。

- ① おりゐる雲|そしるへなるらし|方（1番歌第四句）  
② 人をこそあ|ましかはとなけ|しか|た（2番歌第二句）  
③ 月のかつらの|なひくかけ|みゆーに（17番歌第四句）

④ ひせにくたるいも|うとのもとに|—そ（22番歌詞書）

⑤ 花山院の東宮に×おはしまし、時—て（24番歌詞書）

⑥ 津のかみなり×ときはりまのかみむこにとりて—し  
（29番歌詞書）

⑦ あがさりしきみかにほひのこひしさに—さか（31番歌  
初句）

⑧ いま|とる|そてにうつせるうつりかは—か|で（32番  
歌初句）

⑨ 越前へくたるに|こうちきのたもとに—×（37番歌詞書）

⑩ わかき受りやうの妻かねかも、し—ら（40番歌第五句）

⑪ まち|ちるよの露なれやな|く|に—|ま|かり（「末」に  
「万」を重ね書き）（46番歌初句）

⑫ ほつかはにま|かふみきはのあやめく|さ—よ（59番歌第  
二句）

⑬ なきねのゆめさめてうつ、とおほえ|つるとて—し

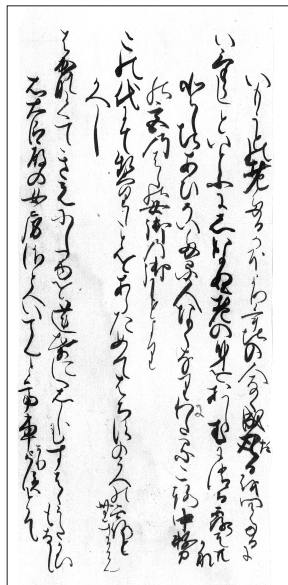
（「て」に重ね書き） 64番歌詞書

⑭ さとへいてんとてくるま|かる|かすとて（68番歌詞書）  
—り（69番歌詞書）

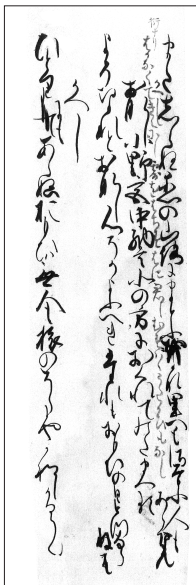
⑮ 69番歌「はかなくて」は68番歌「またしらぬ」の「か  
へし」—68番歌「はかなくて」は67番歌「この代にて」



の「かへし」



架蔵本第6丁表



第6丁裏

⑬はやうけさうしける女×つにくになかたのもりといふ  
一の (77番歌詞書)

⑭御ともにて、はまへちかき所にーさへな (85番歌詞  
書)

右の19例の内、三手文庫本本文の錯誤を訂正し得るものが  
3例と、三手文庫本の誤写過程を推定し得るものが1例ある

外は、全て誤写である。

先ず、錯誤を訂正し得る最大の事例は、⑮の架蔵本以外が  
全て「はかなくて」歌とその詞書を、「まだしらぬ」歌の直  
後に書写し、この返歌として位置付けている歌順の問題であ  
り、架蔵本の該当箇所を、ミセケチと青筆による傍記を除い  
て、翻字してみたい。

とし比あひそいたる人なくなりわたるころ、中務

の宮のは、の女御の御もとより

67この代にて契りしことをあらためてはちすのうへの露と

むすはん

かへし

68はかなくてきえにしつゆを道柴に君しむすは、うたかひ

もなし

右大臣殿の女房、さとへいてんとて車かりかすとて

69またしらぬ恋の山路にまとふかな里へもさそふ人もあら

なん

架蔵本に異同が記されている猪苗代兼宜旧蔵本本文も、他  
本と同一の歌順であったことは、69番歌「またしらぬ」の直  
後の行間に、青筆で次のように記されていることから知られ  
る。

かへし

はかなくてきえにし露をはちすはに君しむすは、うたか  
ひもなし

この歌順の混乱は、早くに生じていたものであり、冷泉家本（『高案帖』所収の古筆切）の真観書写以前の時点で既に気付かれていて、「はかなくて」歌の詞書「かへし」の下に、「はちすのうたのかへしか本」と記されている。

また、ノートルダム清心女子大学の頭注でも、江戸時代後期の仲田顕忠が「此哥は全くまたしらぬ云々のうたの返しともみえず。上のこのよにて云々の哥の返しとみえたり。こは写誤にて前後するものなるへし」と指摘している。

その一方で、三手文庫本系統の伝本には、こうした注記は見られず、架蔵本の親本の伝来過程のある時点で、歌順が訂正された可能性も考えられなくはないが、⑥のように三手文庫本の脱字を正しく書写している事例もあるので、元来正當な歌順で書写されたものと考えておく。

その⑥は、架蔵本「津のかみなりし」ときが正しく、冷泉家本も同様であり、三手文庫本の欠脱であること、『全釈』が考証している通りである（152頁）。⑩は、主格を表す格助詞「の」の有無なのだが、水府明徳会蔵の古筆手鑑収載の伝甘露寺資経筆切には、「の」が記されており、元来は存在し

たと考えられよう。

⑪の架蔵本は「まさかりちる」とあり、書陵部本（冷泉家本の切の伝存は確認されていない）も「さかりちる」とある。何れにしても、歌意は理解しにくく、三手文庫本・山本家本も「まちちる」とあるので、少なくともこの系統の初句の最初の文字は、「ま」であつたのであり、書陵部本と一致する直後の「かり」が、一字不足する三手文庫本の「ち」に誤写されたのは、「可利」を「知」に誤読した結果であろう。すなわち、⑪も、架蔵本が元来の本文を留めていると考えられるのである。

以上の4例を除く15例は、架蔵本の誤写である。

①は、「雲」を「方」に誤読し、②は、「末」を「多」に誤読したものである。③は、「月のかつらの」の主格の「乃」を「尔」に誤読し、④は、「字」を「曾」に誤読したものである。⑤の「東宮にて」は、これでも文意は通るが、冷泉家本を含めた他本は全て「て」を欠いているので、架蔵本の増補であろう。⑦の「あさかりし」は、「飽かざりし」を不注意から逆転させた誤写であり、⑧の2例は、「毛」を「可」に誤読した字形の類似に基づく錯誤と、その「いまか」に引かれて、「とる」を「とて」と書写した上で、「る」を傍記したものである。

る。⑨は、「こうちき」の「こ」を欠脱したものであり、⑩は、踊り字「、」を「良」に誤読したものである。⑫は、「可」を「与」に誤読し、⑬は、「衣」を「之」に誤読したものである。⑭は、「留」を「利」に誤読し、⑰は、「末」を「左」に、「知可」を「奈」に誤読したものである。⑱の「毛」は、衍字である。

以上の検討の結果、架蔵本は、三手文庫本と同一系統に属するものの、その下位に位置付けられる伝本ではなく、並列の関係となろう。

また、架蔵本の校合奥書「奥<sup>三</sup> 永仁元年十一月校他本了」は、冷泉家蔵資経本『源順集』に、「永仁元九六日校了 藤原資経（花押）」と記されていることや、資経が同年十一月四日から十日にかけて、興風・元真・宗子・朝忠・素性の五家集を書写<sup>①</sup>した後、中下旬の書写活動が確認できないことを勘案すると、この頃に、資経が「他本」による校合を行った可能性があり、三手文庫本を含めたこれらの伝本は、資経本系統と称するのが適切であるように思われる。

## 五

次に、架蔵本に青筆で傍記乃至書き入れされている猪苗代

兼宜旧蔵本（以下、兼宜本と略称）の本文について、検討してみた。

傍記で最も多いのは、架蔵本の書写本文が誤読されそうな箇所、兼宜本の本文を記す20例であり、全体の54%を占めている。残る17例が、架蔵本に対する異文や理解を促す傍記乃至書き入れであり、それを掲げると、次の通りである。

- ① つくるうた（8番歌詞書）
- ② 月のうた少将にかはりてや（17番歌詞書）
- ③ ひせにくたるいもそとのもとに（ひせ）の左に「肥前」  
（22番歌詞書）
- ④ あさかりし君かにほひの（31番歌初句）
- ⑤ いまかとて袖にうつせる（墨筆の傍記「る」の右に青筆で「か」）（32番歌初句）
- ⑥ 越前へくたるにうちきのもとに（37番歌詞書）
- ⑦ わかき受りやうの妻かねかもらし（40番歌第五句）
- ⑧ 見要ぬもの、めつらしきかな（50番歌第四句）
- ⑨ しれる人なか、はへたて、ありけるに（51番歌詞書）
- ⑩ 七夕の雲地はしらすなか、はを（51番歌第三句）
- ⑪ ほつ河にまよふ汀のあやめ草（59番歌初句）
- ⑫ さめてうつ、と覚しつるとて（64番歌詞書）

⑬とし比あひそいたる人なくなりわたるころ(67番歌詞書)

⑭ かへし

はかなく<sup>衍ナリ</sup>てきえにし露をはちすはに君しむすは、うた

かひもなし(69番歌の後の行間に青筆で細字書き入れ)

⑮名にしおは、いさやねとめんまきの里(76番歌第二句

左傍記)

⑯ひとりしてあまたからむるおもものもち(81番歌第二句)

⑰御供に<sup>まで、</sup>はさへ<sup>ちかき</sup>なき所に前栽など(85番歌詞書)

右の内、架蔵本の誤写箇所<sup>ちかき</sup>に正当な本文を傍記するのは、

④⑥⑦⑪⑫⑰の6例であり、これについては、前節で三手文

庫本との異同箇所として論じたが、山本家本文は、全て三

手文庫本と一致している。

また、⑭の歌順の異同を書入れするのは、架蔵本を除く現存全伝本がこうした錯誤を踏襲している結果であり、「衍ナリ」と記すのは、細字書き入れ歌が、架蔵本68番歌と重複しているからである。

青筆で傍記した兼宜本が、現存伝本の何れに近いのかを判断する目安になるのは、⑬「なくなり」たる⑰「あまたうらむる」の2例であり、これらは、山本家本とのみ一致して

いる。⑧「見要ぬ<sup>ぎ</sup>」も、山本家本にのみ「本」とあり、これに依ったと考えてよからう。②「かはりてなり」についても、山本家本は、「也」と判読可能な字形で書写されており、これも傍証となろう。

また、③「ひぜ」と濁点を付すのは、三手文庫本・山本家本ともに朱筆で加筆しており、⑮「ふ坎」という傍記は、三手文庫本と一致し、山本家本も「ふね坎」と傍記していて、これに基づいて異同部分のみを「ふ坎」と記す可能性はあり、矛盾はしない。

⑨⑩「なか、は」に「中川」と漢字を傍記するのは、三手文庫本の左傍記の朱筆と⑩は一致するが、⑨には傍記が見られない。山本家本は、⑨⑩ともに「中川」と本文を漢字で記しており、これに基づいたと考えると理解し易い。

傍記が錯誤本文である①は、「留」と「利」、⑤は、「留」と「可」の字形の類似による誤読であり、山本家本の字形は、誤読しかねないものとなっている。

以上の検討結果から、兼宜本は、傍記と書き入れの僅少な事例を比較する限りでいうと、山本家本に近い本文を持つ伝本であったといえそうに思われる。

## 六

次に、歌頭に記されている「集付」について比較し、三手文庫本・山本家本・架蔵本の位置付けをしてみた。

先ず、「集付」を掲げると、次の通りである。

① 14 番歌「後拾」―【墨】三手文庫本・山本家本・架蔵本

② 25 番歌「拾哀／栄花みはてぬ夢」―【朱】三手文庫本・山本家本

③ 26 番歌「同」―【朱】三手文庫本・山本家本

「新古小町」―【墨】三手文庫本・山本家本・架蔵本

④ 31 番歌「拾遺／後中書王」―【墨】三手文庫本・山本家本・架蔵本

⑤ 65 番歌「拾雑下」―【朱】三手文庫本・山本家本

⑥ 76 番歌「夫木」―【墨】三手文庫本【朱】山本家本

⑦ 78 番歌「千載」―【墨】三手文庫本・架蔵本【朱】山本家本

⑧ 79 番歌「続後」―【墨】三手文庫本・架蔵本【朱】山本家本

右の内、三伝本が墨筆で一致する①「後拾」（作者具平親

王の記載なし）③「新古小町」④「拾遺／後中書王」と、伝

写上は三手文庫本より下位に位置する山本家本のみ朱筆で、三手文庫本と架蔵本は墨筆で記す⑦「千載」（「拾遺」を一致して錯誤）⑧「続後」の5例は、勅撰集名を二字の略称で記すとともに、①の例外はあるが、作者が為頼ではない場合に名前を記す点で一致しており、⑧の「続後撰集」から、その成立時期である建長三年〔1171〕十二月以降のことと知られる。

朱筆の②「拾哀」⑤「拾雑下」は、勅撰集名一字と部立名の略称を記す点で一致しており、三手文庫本の時点か、それ以前の時点で「集付」されたものかは、判然としない。

また、②に記された「栄花みはてぬ夢」と③「同」の朱筆も、同時期に付されたものと考えられ、これは、『栄花物語』の次の記事に依っている。

世の中のはれにはかなきことを、撰津守為頼朝臣といふ人、

世の中にあらましかばと思ふ人なきは多くもなりにけるかな

これを聞きて、東宮の女蔵人小大君、返し、

あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいつまであらんとすらん

とぞ。(巻四・みはてぬゆめ、新編日本古典文学全集本  
①224頁)

残る⑥「夫木」は、三手文庫本と架蔵本に共通する墨筆による勅撰集の「集付」以降、朱筆で勅撰集の「集付」と栄花物語巻名を付記する以前のある時点で記されたものと推測されるが、具体的な時期は不明である(水府明德会蔵の古筆手鑑<sup>22</sup>収載の伝甘露寺資経筆「為頼集切」に、「夫木」の集付はない)。

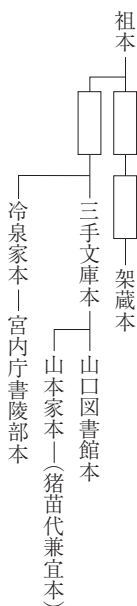
また、兼宜本に基づく架蔵本への青筆での「集付」追加は、25番歌「拾哀／栄花見はてぬ夢」、65番歌「拾雑下」、76番歌「夫木」の3箇所であり、26番歌「同」を欠いているが、転写の際の錯誤によるのであろう。これらは、三手文庫本・山本家本と一致しており、このことは、前節で既述した兼宜本は、山本家本に近い本文を持った伝本であることと、軌を一にしているといえよう。

尚、右で検討した「集付」は、網羅的なものではなく、気付いた範囲でなされたものようである。漏れたものを記すと、勅撰集としては、13番歌『続後拾遺集』具平親王、18番歌『千載集』具平親王、27番歌『拾遺集』公任、61番歌『千載集』、70番歌『新古今集』小野宮石大臣、71番歌『新古今集』

の6首があり、『夫木抄』としては、17番歌、28番歌、36番歌、43番歌、45番歌、51番歌、77番歌の7首がある。

### 結語

以上の検討結果を踏まえて、本稿で論じた冷泉家本・書陵部本・三手文庫本・山本家本・架蔵本・兼宜本の『為頼集』6伝本の伝本系統を整理すると、次のようになる(兼宜本は、本文の極一部しか確認できず、便宜的な位置付けに過ぎないので、括弧して記す)。



### 【資経本系統】

架蔵本

三手文庫本—山本家本—(猪苗代兼宜本)

伝甘露寺資経筆「為頼集切」3葉

### 【真観 (藤原光俊) 本系統】

冷泉家本 (真観自筆本) —宮内庁書陵部本

伝藤原光俊筆「為頼集切」(冷泉家本) 5葉

## 註

- (1) 筑紫平安文学会著『為頼集全釈』（風間書房 平成六年五月）
- (2) 和歌史研究会編『私家集伝本書目』（明治書院 昭和四〇年一月）
- (3) 冷泉家時雨亭叢書・第六十三卷『平安私家集 十一』（朝日新聞社 二〇〇七年二月）。解説は、田中登氏。
- (4) 原本未見。註(3)に掲載された田中氏の解説に基づいて、まとめた。
- (5) 原本未見。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」付載の「調査記録」と画像に基づいて、まとめた。
- (6) 書写年次を表す「延午」の「午」は、干支であるから、「延」を年号の略称と考えると、「延宝」か「延享」の何れかとなる。延享年間(1744～48)に午年はなく、またそれ以前の享保四年1719に、通規(天和四年1684九月十五日、通誠に改名)は薨去しているのので、延宝六年戊午1698のことであろう。書写者の「通規」は、初名は時通、寛文十三年(1723)九月六日に、通縁に改名し、延宝六年に、通規に再度改名している(『公卿補任』第四篇)。
- (7) 川瀬一馬氏編『田中教忠藏書目録』（自家版 昭和五七年一月）
- (8) 冷泉家本は、古筆切として8～23番歌、45～79番歌の51首(全86首)が切り出されているが、48～50番歌と68～71番歌の切は、『古筆学大成 第十九卷 私家集三』(講談社 一九九二年六月)に収載されていて、確認ができる。田中氏は註(3)前掲書の解説で、53～56番歌、72～74番歌の切の存在も指摘しておられるが、稿者は未見であり、本文を比較検討できるのは、約半分の42首に留まる。
- (9) 冷泉家本で三字の踊り字を「        」と記す箇所について、三手文庫本・山本家本・架蔵本は、「こ、」と判読できる字形で書写されている。「全釈」は、24番歌詞書「なにもこならんものを」29番歌詞書「いへの庭とこころこすのかたに」と本文を立てて、「        」や「不審」(145頁)、「        」も未詳。「あるいは何らかの誤脱があるか」(152頁)と付注する。祖本はこの箇所について、冷泉家本と同じ踊り字が記されていたのを、三手文庫本と架蔵本の親本以前のある時点で、「こ、」と誤読したのではなからうか。元来の本文は、24番歌詞書「なにも、        、なからんものを」(冷泉家本にある「か」を、三手文庫本や架蔵本が欠いているのは、「        」との繋がりで欠脱したのであろう)、29番歌詞書「いへの庭とこころ、        、すのかたに」であつたと考えられるのである。
- (10) 『古筆学大成 第二十八卷 釈文三』(講談社 一九九三年一月) 14頁に翻字されているが、図版は掲載されていない。それによると、「はやうけさうしける女のつこのなかつたの

もりという所にありとき、てやりける」とあり、架蔵本は「女の」は記しながら、「国の」の方は欠いている。

尚、伝甘露寺資経筆切は、藤原資経筆私家集の筆跡とは異筆であるという（『古筆学大成 第十九卷 私家集三』（講談社

一九九二年六月）「解説」386頁）。

（11）冷泉家時雨亭叢書・第六十五、六十六卷『資経本私家集 一・

二』（朝日新聞社 一九九八年二月、二〇〇一年六月）

（12）註（10）前掲書14頁掲載の翻字「為頼集切3」76番歌参照。

（そね・せいいち／本学日本文学科特任教授）